

知的障害教育における高等部家庭科の効果的な授業づくり ～主体的・対話的で深い学びに向けた授業実践～

上園宗徳*・倉田沙耶香*・古里王明*・辻 清美*・八幡彩子**

Creating effective lessons for senior high school section home economics
in intellectual disability education
～The class practices for proactivity, in depth study by thinking for
themselves through discussion～

Munenori UEZONO, Sayaka KURATA, Kimiaki KOZATO, Kiyomi TSUJI and Ayako YAHATA

1. はじめに

2017年4月から2019年3月までの2年間、熊本大学教育学部附属特別支援学校と熊本大学教育学部で共同研究を行ってきた。

本稿では、2018年4月から2019年3月までの1年間、高等部で行った家庭科における年間計画の作成、実践内容、成果と課題について報告する。

1) 教科選定の理由

熊本大学教育学部附属特別支援学校高等部では、「フォローアップミーティング」を行っている。これは、卒業して3年、6年、10年後の「働く」「家庭」「余暇」の3つの生活について面談を実施し、卒業生のフォローアップを行うものである。この際、アンケートを実施したところ、働く生活に関しては伸びがみられるが、一方、家事、外出や趣味等の家庭生活と余暇生活の項目に落ち込みがみられることが分かった。

それを受けて、平成29年度は体育、音楽、家庭の3つの教科を研究対象として選定し、研究を行ってきたが、研究を進めていく中で、高等部段階においては、家庭科の学習をさらに充実させることが、卒業後の「外出」や「家事」の課題へのアプローチにつながると考え、平成30年度は、研究対象を家庭科に絞ることとした。

2) 研究の課題及び研究方法

(1) 研究の課題

まずは前年度、課題としてあがった「学習内容の定着と般化」「家庭との連携の在り方」の2点につ

* 熊本大学教育学部附属特別支援学校

** 熊本大学大学院教育学研究科

いて意識した取組を行うことで、家庭科における資質・能力をより育むことができると考えた。

次に、授業の構成や流れが学習内容によって変わることによって、生徒によっては見通しがもちづらい状況があるため、3学年ともに授業の構成と流れを統一することで、より主体的な学びにつながると考えた。また、各学年で感じている授業づくりのポイントや有効な手立てを共有し、整理していくことが、よりよい授業実践につながるのではないかと考えた。

(2) 研究方法

① 3年間を見据えた年間指導計画作成

高等部の家庭科について、3年間を見据えた年間指導計画作成のプロセスをとおして、高等部においての「何ができるようになるか」「何を学ぶか」を明らかにし、教科の特性を活かした学習内容・学習方法のあり方について整理を行う。

② 主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくり

各学年で日々の実践した授業の計画と評価（Sシート・Mシート）から、「主体的・対話的で深い学びに向けた授業づくりのポイント」を学部全員で共有し、「どのように学ぶか」について図1に示す授業づくりの3つの柱の観点を取り入れた授業実践に取り組む。

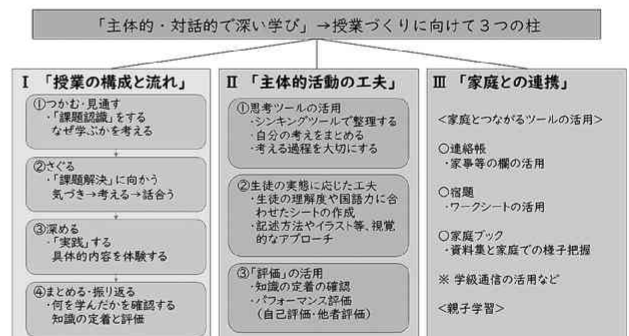


図1 授業づくりの3つの柱

2. 年間指導計画作成までの研究経過

これまで、高等部における家庭科の年間指導計画は、クラスの実態や生徒の障害の状態、また学習の進捗状況に応じ、毎年見直しを行いながら各学年で計画を立て授業に取り組んできた。そのため、指導計画や指導内容について、学習の積み重ねやつながりの部分が課題となっていた。そこで、家庭科の学習内容において、3年間の枠組みで学習を捉えなおし、整理していくこととした。

3年間を見据えた家庭科における年間指導計画作成に向け、次の手順で高等部職員全員でのチームアプローチと大学との連携（家庭科の専門性）を基本として、学校教育目標を妥当性して捉え、学習指導要領を正当性として捉えて、下記の手順で整理を行うこととした（図2）。



図2 年間指導計画作成の手順

1) 家庭科の年間指導計画作成

①高等部で育成を目指す資質・能力

学校教育目標を受け設定されている学部教育目標について、育成を目指す資質・能力一覧（平成28年度作成）と「在学中に身につけてほしい力」（企業アンケート）、現場実習評価表を材料とし、高等部の段階で「何ができるようになるか」の見える化（構造化）に取り組んだ。

その際、支援者ミーティングで出てきた課題や卒業生の課題も併せて、教育支援計画における「かかわる・くらす・はたらく・たのしむ」の4つの視点について、ブレインストーミングで意見を出し合い、高等部職員全員で共有を行った。その中で、10年後の社会を見据え、高等部段階でどのような資質・能力を育てていくことが必要となるのかを明確にしたものが図3である。

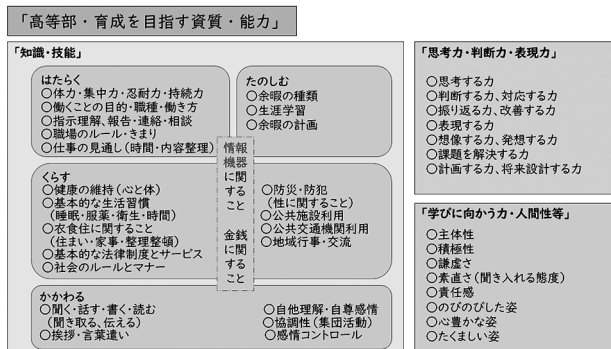


図3 高等部で育成を目指す資質・能力

②家庭科における育成を目指す資質・能力

家庭科における育成を目指す資質・能力についても、高等部の目指す資質・能力を構造化した同様の手順で、家庭科で「何ができるようになるか」を4つの視点で整理を行い、家庭科における育成を目指す資質・能力を高等部職員全員で明確にし、共通理解を図った（図4）。

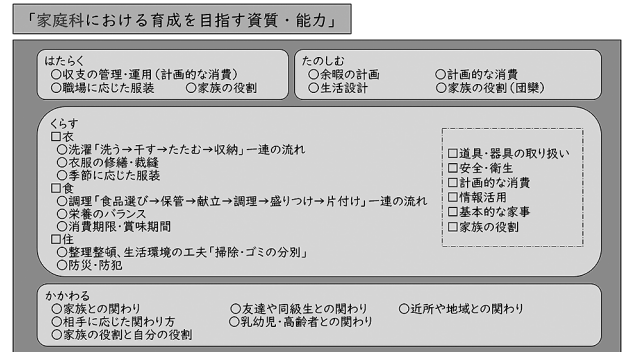


図4 家庭科における育成を目指す資質・能力

③家庭科における学習内容の整理

学習指導要領で示されている学習内容について、「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」を具体的にするため、3年間で学ぶべき学習内容を洗い出し、各学習内容の学び方を整理した。まず、3年間で学ぶ学習内容について、家庭科で育成を目指す資質・能力と照らし合わせながら、家庭科の内容の五つの観点で洗い出し、各学習内容がもつ学び方の特性（単的・系統的・反復的等）で整理した。どの学年でどのように学びをつなげていくことが有効であるのかについて、各学習内容の学びの特性を踏まえ、洗い出しを行った（図5）。

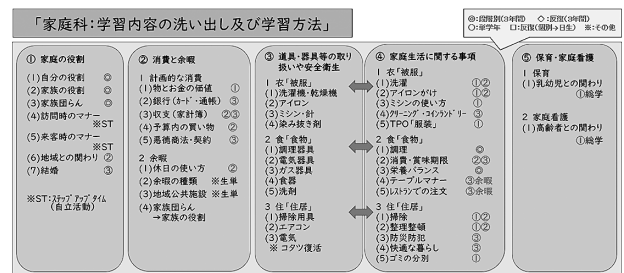


図5 家庭科の学習内容の整理

④家庭科の学習内容と3学年の配置

次に、前項で整理した家庭科の学習内容について、観点ごとに系統的につながりが見えるようにし、3学年の「いつ学ぶのか」を整理し、割り振りを行った（図6）。

「家庭科：3年間の学習内容及び学習方法」

1年	2年	3年
① 家庭の役割 (1) 身分の役割 (2) 家族の役割 (3) 地域との関わり ② 消費と余暇 計画的な消費 (1) 物と金銭の価値 ③ 家庭生活に関する事項 (1) 洗濯 (2) アイロンかけ (3) ショッピングの仕方 (4) TPO(場面) ④ 家庭・器具等の取り扱いや安全衛生 (1) 洗濯機・乾燥機 (2) 掃除機 (3) 掃除用具・電気器具・ガス器具 (4) 食器・洗剤 (5) 洗濯物 (6) 掃除用具 ⑤ 学習・家庭看護 (1) 活動記との関わり → 給字(地域交流) (2) 家庭看護 (3) 高齢者との関わり → 給字(地域交流)	① 家庭の役割 (1) 身分の役割 (2) 家族の役割 (3) 地域との関わり ② 消費と余暇 (1) 計画的な消費 (2) 消費の仕方 (3) 学習の仕方 (4) 家庭日記 (1) 科目の使い方 余暇の種類 → 生単 ③ 家庭生活に関する事項 (1) 洗濯 (2) アイロンかけ ④ 家庭・器具等の取り扱いや安全衛生 (1) 洗濯機・乾燥機 (2) 掃除機 (3) 掃除用具・電気器具・ガス器具 (4) 食器・洗剤 (5) 洗濯物 (6) 掃除用具 ⑤ 学習・家庭看護 (1) 活動記との関わり → 給字(地域交流) (2) 家庭看護 (3) 高齢者との関わり → 給字(地域交流)	① 家庭の役割 (1) 身分の役割 (2) 家族の役割 (3) 地域との関わり ② 消費と余暇 (1) 計画的な消費 (2) 消費の仕方 (3) 学習の仕方 (4) 家庭日記 (1) 科目の使い方 余暇の種類 → 生単 ③ 家庭生活に関する事項 (1) アイロンかけ (2) 洗濯機・乾燥機 (3) 掃除機 (4) 掃除用具・電気器具・ガス器具 (5) 食器・洗剤 (6) 洗濯物 (7) 掃除用具 ④ 家庭・器具等の取り扱いや安全衛生 (1) 洗濯機・乾燥機 (2) 掃除機 (3) 掃除用具・電気器具・ガス器具 (4) 食器・洗剤 (5) 洗濯物 (6) 掃除用具 ⑤ 学習・家庭看護 (1) 活動記との関わり → 給字(地域交流) (2) 家庭看護 (3) 高齢者との関わり → 給字(地域交流)

図6 家庭科における3年間の学習内容及び学習方法

⑤他教科・行事との横断的なつながり

最後に、割り振りを行った学習内容について、学校行事や他教科等との横断的なつながりについて検討できるよう、カリキュラムマップ(図7)を用いて、1年単位で家庭科の内容を「いつ学ぶのか」について整理を行った。

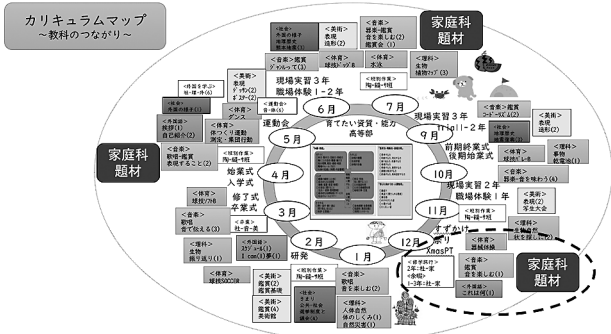


図7 カリキュラムマップ

⑥家庭科の年間指導計画

上記①から⑤の手順を経て作成した3年間を見据えた家庭科の年間指導計画が表1である。家庭科の学習において、3年間で、何を、いつ学ぶのかを明確に示すことができた。この年間指導計画をベースとしながら、生徒一人一人の実態や各クラスの実態等を十分に踏まえ、どのように学びを積み重ねてい

表1 家庭科の年間指導計画(3学年)

観点	①「家庭の役割」	②「消費と余暇」	③「道具・器具等の取り扱いや安全衛生」
学年	1年	2年	3年
学習テーマ	家庭生活についての基本的な理解と、衣食住に関する基礎	家庭生活に必要な衣食住に関する知識・技能の深まり	家庭生活に必要な衣食住に関する実践力(卒業後)
月日	「習得」	「学習内容」	「活用」
4/19	【家庭の役割】 ・身分の役割 ・家族の役割 ・地域との関わり	【家庭の役割】 ・身分の役割 ・家族の役割 ・地域との関わり	【家庭の役割】 ・それぞれの役割 ・家族日記 ・地域日記
4/26	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【家庭の役割】 ・身分の役割 ・家族の役割 ・地域との関わり	【家庭の役割】 ・それぞれの役割 ・家族日記 ・地域日記
5/28	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
6/28	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
7/5	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
9/13	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
10/2	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
10/25	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
11/21	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
12/20	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
1/24	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
1/31	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
2/7	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
2/15	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方
2/28	【家庭生活に関する事項】 ・洗濯 ・アイロンかけ ・掃除機 ・掃除用具	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方	【消費と余暇】 ・計画的な消費 ・消費の仕方 ・学習の仕方

くことが有効であるのかを考えた授業づくりが必要となる。

2) 家庭科の教科の特性

年間指導計画作成の中で見えてきた、家庭科の教科の特性について、次のことが挙げられる。

- 高等部の目指す資質・能力の中で「くらす」生活に向けた重要な位置づけの教科となる。
- 学習内容の一つ一つについて、系統的に学ぶ・繰り返し学ぶ、などの学びの特性がある。
- ライフステージに応じた学びが必要な題材があり、学年単位の集団での学びが大切である。
- 他の教科や生活単元学習、行事等と関連させて学ぶ必要がある。
- 3年間系統的に学ぶことで、生活の営みに関する見方・考え方を深めることができる。
- 授業で終わらず、家庭・地域へとつなげていくことが大切である。
- 1単位時間を2コマ設定することで、より深い学びにつなげることができる。

3) 高等部の目指す資質・能力の見直し

高等部で育成を目指す資質・能力について、社会のニーズとなる企業側からみた「在学中に身につけてほしい力」のアンケート(企業:100社)と、卒業生の姿「フォローアップミーティング」(卒業後3・6・10年目の姿:卒業生55人)を用いて、見直しを行った。

「フォローアップミーティング」の結果から、「家事」「外出」「地域行事への参加」「作業スキル」の落ち込みが見られ、在学中に定着が難しい部分は、卒業後もスキルの獲得や改善が難しいことが分かった。そのため、在学中にこれらの学習内容の基礎・基本を確実に押さえ定着を図っておくことが必要となる。

「在学中に身につけてほしい力」のアンケート(企業:100社)から、「就労における作業スキル」よりも挨拶や返事、相談等の「コミュニケーション面」と、規則正しい生活や遅刻・欠勤がない等の「生活面」が求められていることが分かった。

これらの結果をもとに、高等部の目指す資質・能力を見直す中で、「家事」(炊事・洗濯・調理・掃除・手伝い等)、「身辺自立」(持ち物管理・片付け・整理整頓・必要物の準備等)、「生活リズム」(規則正しい生活)等、家庭科における育成する資質・能力の重要性を再認識した。

また、「なぜ学ぶのか」を生徒自身が考える機会や親子で学ぶ機会、在学中に地域とつながる機会を

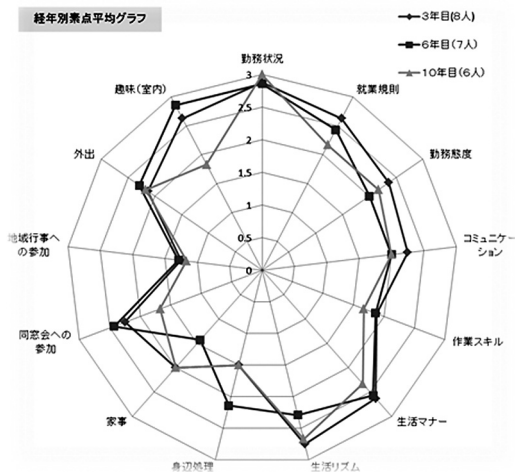


図8 卒業生の姿「フォローアップミーティング」

設定していくことが必要であると考え。

今後、「在学中に身につけてほしい力」のアンケート（企業：100社）については、さらに分析を行い、社会（企業）から求められているニーズを明らかにし、高等部の教育課程に落とし込んでいくとともに、学校全体としての教育課程においても活用していくことが課題となる。

3. 授業実践① 高等部1年の取組

家庭との連携を基に、生徒が自ら学びを活用する 家庭科の授業づくり

4月の入学式から新しいメンバーでの学校生活が始まった。高等部から新しく入った生徒、小学部から本校に在籍している生徒と、生徒の実態やこれまでの学び、発達段階にはそれぞれ違いがある。その中で、家庭科での見方・考え方を働かせた学習をどのように組み立てていくのか、また、学びのサイクルとして、授業で育んだ力を、実際の家庭生活や社会生活でどのように活用し、学びを深めていくのか、という点を重視した授業実践を行った。

1) 授業実践の目的と方法

授業づくりにおいて、「授業構成」「主体的活動への工夫」「家庭との連携」の3つの視点を基に学習を組み立てることで、主体的・対話的で深い学びを実現することができる。また、家庭との連携を強化することで、授業で育まれた力を、実際の家庭生活や社会生活に般化することができる考えた。

授業実践の方法は、まず、前述した3つの視点を基に授業を計画し、S研：計画（1単位時間での授業前の事前検討会）を綿密に行う。次に、授業を実践し、主体的で対話的な深い学びが実現できる授業

であったか、基礎・基本となる知識や技能を習得することができたかを検証する。さらに、家庭と連携を図り、習得した知識や技能を生活場面で活用することにつなげることができたかを確認する。

2) 生徒の実態

熊本大学教育学部附属特別支援学校高等部1年生には、男子5人、女子4人の計9人の生徒が在籍している。前述したとおり、発達段階やこれまでの学びに違いはあるが、それぞれが家庭科の学習をとおして知識や技能を学び、経験を重ねている。授業中に積極的に発言する生徒や、控えめな性格で積極的な発言はあまり見られないが自身の考えや思いを持っている生徒、友達の意見を聞いて考えを深める生徒、教師とのやりとりを基に自身の考えを整理する生徒など、実態は様々である。学習意欲が高く、友達や教師との学習を楽しみにしている生徒がほとんどである。

3) 3つの視点における取組の実際

高等部1年生では、家庭科における基礎・基本となる知識や技能を習得すること、習得した知識や技能を家庭生活や学校生活の他場面で活用すること、の2点に重点を当てた授業づくりを行った。その中で、前述した3つの視点での取組の実際を以下に示す。

(1) 授業構成

「つかむ・見通す」段階において、基礎・基本となる知識や技能の習得だけでなく、「なぜ学ぶのか」「なぜこうなるのか」などの理由を考え、友達と意見交換をすることで「さぐり」、その後、学んだ知識や技能を実際に体験、実践することで「深め」、「まとめる・振り返る」ことで定着と般化を促した。以下に示すのは、授業構成「深める」段階における取組の実際および生徒の変容である。

①衣：洗濯（5・7月）

洗濯表示の見方や洗剤の計量の仕方（写真1）、洗濯物の干し方などを学習した。

基礎・基本を確認し、写真2のように、体操服な



写真1

教師と一緒に洗剤の計量の仕方を確認する様子



写真2

洗濯表示を確認する様子

どの身近なものを活用しながら学んだことを経験する過程を大切にすることで、知識を増やすだけでなく、技能も伸びた。グループでの話し合いを設定したが、自発的な発言が少なく、生徒の意見を教師が引き出しながら話し合いを進めることが多かった。

②保育・家庭看護（9月）

育児休業中の本校職員にゲストティーチャーを依頼し、乳幼児の生活についてインタビューをしたり、実際に触れあったりする学習（写真3）を行った。また、高齢者疑似体験（写真4）を行い、高齢者が感じていることや困り感などを実体験した。それらの学習経験をもとに、実態別でのグループによる話し合いを（写真5）行い「異年齢（乳幼児・高齢者）とのかかわり」について考えた。



写真3

乳幼児とふれあう様子



写真4

高齢者疑似体験の様子

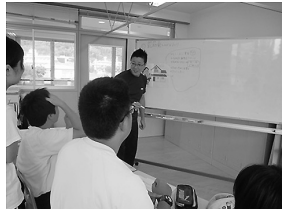


写真5

ロールプレイを行いながらグループで話し合う様子

乳児と触れあったり、疑似体験など実際に体験したりすることで、一人一人が課題を感じ、「どのようにしたらいいのか」を考えることができた。友達の様子を見て、より良いかかわり方を考え、自らやってみようとする主体的で深い学びの姿が見られた。

③食・調理（10・11月）

本校栄養教諭がゲストティーチャーとして授業を行い（写真6）、三色食品群や食事バランス（主食・主菜・副菜・副々菜）などの食に関する基礎・基本となる知識を学び、学んだ知識を基にレシピを作成し（写真7）、生活単元学習「調理をしよう」（12月）へとつなげた。

基礎・基本を学び、学んだ知識を自分で活用しながらレシピを考えることができた。家庭科の学習だけでなく、生活単元学習（写真8, 9, 10）や親子調理学習、リクエスト給食などの学校生活の他場面で学んだ知識などを活用する姿も見られた。調理活



写真6

栄養教諭と食事バランスについて考える様子



写真7

友達と話し合いながらレシピを考える様子



写真8



写真9



写真10

生活単元学習「調理をしよう」（12月）での様子

動においても自分たちで話し合いながら取り組む姿が増えた。

(2) 主体的活動の工夫

それぞれの授業において「考える」過程を大切にし、実態に応じたワークシートを作成することで、生徒がより主体的に学習に取り組むことができるようにした。

「考える」過程において「思考を整理し、深める」ことができるように、写真11のように板書を工夫した。全員の考えなどを板書することで、情報を視覚的に捉え、比較することができた。また、友達のを参考に、新たな考えに気付き、自分の思考を深めることにもつながった。

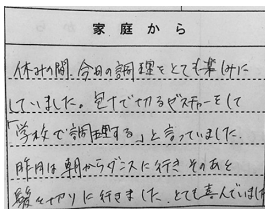


写真11 家庭科（住居）学習時の板書例

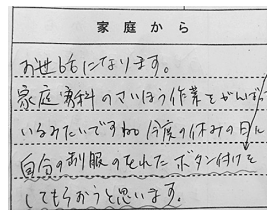
(3) 家庭との連携

家庭科の学習で学んだ知識や技能を活用するためには家庭との連携が必要であるため、以下の2点にポイントをおいて連携を図った（資料1, 2）。

①連絡帳での情報共有



資料1



資料2

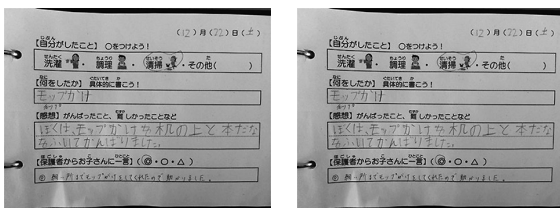
家庭（保護者）からの連絡帳での記載

年度当初の学級懇談会で「今年度は家庭科の研究実践を行う」こと、「家庭科という教科の特性上、家庭との連携を図ることが生徒の確かな学びにつながる」ことなどを説明していたことで、家庭科の学習に対する生徒の家庭での様子（期待など）を、家庭から知らせていただくことができた。家庭科の学習を行った日は、学校から「今日このようなことをしました」「このような様子でした」などを連絡帳に記入したことで、家庭から「家庭でも取り組みたい」などの記述が得られた。生徒の実態把握や情報共有におけるツールとして連絡帳を活用することができた。

②『家庭B o o k』の活用

家庭実践の際活用できるよう、学習で使用したスライドや資料などをA5サイズに印刷し、記録用紙と一緒にファイルにまとめた（資料3）。

保護者には「学校で学習したやり方でなくて構いません」「手順など各家庭のやり方で取り組んでください」と、事前に説明してから配付した。



資料3

家庭B o o kと取組の一例（記録用紙）

学習後の長期休業日に各自持ち帰り、家庭で実践するきっかけとなった。記録用紙には『保護者からの一言』という欄を設けた。保護者から「ありがとう」「次はこうしてみるといいよ」などの感謝の言葉やアドバイスを、生徒自身が受け取ることで、より意欲的に取り組むことができた。各家庭で実践を積み重ね、生徒自身に合うやり方を見つけ、学習で学んだ知識や技能の定着と般化につながった。

4) 成果と課題

授業構成においては、「なぜ」という背景や理由等を考える授業を展開したことで、生徒がそれぞれ課題認識をもちながら学び、知識を深めることにつながった。また、学習で得た知識や技能を「体験する（深める）」過程を授業の軸に置き、実践的・体験的に学習することで、知識の理解と定着を図ることができた。

主体的活動の工夫においては、思考を整理し共有する板書を行ったことで、生徒が自らの考えを深めたり拡げたりすることができた。また、個の実態に応じたワークシートを作成することで、一斉授業で学習を進めるうえで、個々の生徒に応じた支援、学びを確保することにつながった。

家庭との連携においては、『家庭B o o k』や連絡帳などのツールを用いて、生徒の学びを保護者と教師が共有し、授業で学んだことを「家庭でやってみよう」という意欲につなげ、学んだことを実際に活用するきっかけづくりとなった。年度当初や学習前など、必要に応じて家庭へ情報を発信したことで保護者の理解と協力を得ながら授業を実践できたことも成果の一つである。

今年度、試行的に作成した『家庭B o o k』は一定の成果を得たが、長期休業期間での使用となったため、学習したことを家庭で実践するまでに期間が空いてしまったことは課題である。また、毎時間学習の最後に「まとめる・振り返る」の時間を設け、自己評価を行ってきた。個別のシートを作成し、発段階に応じた手立てを行ったが、知的に障害のある生徒が自分で学習をふり返り、自己を客観的に捉えて評価をするための手立てとしては十分だったとは言えず、今後の課題である。

5) 考察

家庭科という教科の特質上、家庭との連携は必要不可欠である。家庭と連携するためには、生徒の情報を共有するだけでなく、家庭科の学習で生徒に身に付けてほしい力や、授業の意図などを学校から家庭に発信していくことも大切だと考える。また、生徒の実態を知り、学習後の般化を促すためにも、家庭と情報を共有しながら授業を計画したり、評価・改善したりしていくことで、よりよい授業になるのではないだろうか。

平成30年度は高等部全体で卒業後を見据えた3年間の系統性のある学習計画を検討し、高等部1年生は、家庭生活に関する「基礎・基本」となる知識や技能の「習得」をテーマに学習を進めた。「なぜ」という背景や理由等を考え、基礎・基本を学び、学

んだ知識をもとに実際に体験・実践するというサイクルによる学習を積み重ねていくことで、学びを深めることにつながったと考える。確かな学びにより、知識や技能が定着したことで、生徒が自ら学びを活用することの素地が培われ、次年度の高等部2年生段階での「活用」につながり、より豊かな学びへと発展していくと考える。

4. 授業実践② 高等部2年の取組

家庭科における問題解決的な学習過程を

取り入れた授業づくり

～生徒の実態に応じた授業展開～

知的障害のある生徒は、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくい特性があり、実際の・具体的な内容の指導が抽象的な内容の指導よりも効果的であるとされる。そこで高等部2年では、家庭科における資質・能力の育成のために、実際の、具体的な内容を取り上げ、「学習内容の定着と般化」についてより意識した取組を行うこととした。

1) 授業実践の目的と方法

授業実践の目的は、家庭科の授業において、生徒が問題を把握しやすく、理解度をより向上させることのできる授業づくりを考察することである。

授業実践の方法は、高等部「授業づくりのポイント」に沿って課題設定からまとめまで、生徒自らが問題を把握し、解決の方法を考えることができるような問題解決的な学習過程を取り入れることである。

2) 生徒の実態

熊本大学教育学部附属特別支援学校高等部2年生は、男子6人、女子2人の計8人の生徒が在籍している。障害の程度は様々で、軽度の生徒から最重度の生徒まで在籍し、障害の幅の大きい学級である。総じて未経験の事柄についてのイメージを持ちにくく、問題の把握や学習への意欲の継続が難しい生徒が多いが、経験したことのある事柄だとイメージを深めたり、意欲的に学習に取り組んだりすることができる。

3) 問題解決的な学習過程の実際

高等部2年生では、高等部「授業づくりのポイント」の「つかむ」段階を「体験を通して問題をつかむ」、「さぐる」段階を「解決・改善策をさぐる」、「深める」段階を「検討したことを実際に行う」、「まとめる」段階を「再実行によって検討したこと

が有効であることに生徒自身が気付く」とし、以上の流れで家庭科の授業展開を行った。以下に「家庭生活に関する事項」の「住居」について行った「整理整頓」の授業における授業展開を述べる。

①題材の目標

題材の目標は表2に示した3点である。

表2 題材計画

○知識・技能 持ち物の整理・整頓やゴミの分別について実際的な知識と技能を身に付ける。
○思考力・判断力・表現力 必要なものと不必要なものを判断して整理・整頓することができる。
○主体的に学習に取り組む態度 整理・整頓の仕方を生活に生かそうとすることができる。

②題材計画

本題材は3次(4時間)の取り扱いである(表3)。

表3 題材計画

第1次 (2時間)	○整理整頓 ・部屋の整理整頓をしよう
※S研の実施	
第2次 (1時間)	○ごみの分別 ・ゴミの分別 ・ゴミカレンダーの見方 ・リサイクルについて知る
※S研の実施	
第3次 (1時間)	○まとめ ・整理整頓のポイント ・ゴミの分別確認 ・今後の生活でできること
※S研の実施, M研の実施	

③第1次の授業展開

2時間扱いで行った第1次の授業における問題解決的な学習過程については表4の通りである。

表4 「第1次」の授業構成

つかむ	・散らかった部屋の中から指定されたものを探す ・見つけるまでの時間を計測する
さぐる	・ものを探す際、もっと効果的に探せないか考える ・整理整頓の仕方について意見を出し合う
深める	・意見をもとに整理整頓する
まとめる	・再度指定されたものを探す ・時間を測定し、はじめにかかった時間と比べる ・整理整頓の重要性に生徒自ら気付く



写真12

家庭科「整理整頓」
授業の様子（つかむ）



写真13

家庭科「整理整頓」
授業の様子（さぐる）



写真14

家庭科「整理整頓」
授業の様子（深める）



写真15

家庭科「整理整頓」
授業の様子（まとめる）

4) 成果と課題

授業のはじめに「自分なりの方法で実際に体験してみる」ことで、生徒自身が問題を把握しやすくなった。また、問題の把握ができたことで、その後の「さぐる」「深める」「まとめる」過程への意欲の喚起につながった。また、「まとめる」での気づきや感想の欄の記入がより具体的なものになった。「学習内容の定着と般化」についても、保護者から連絡帳に「自分から掃除・片付けをしてくれました」との記入があり、一定の効果があったと言える。

ただし、あくまでも高等部2年生で取り扱う内容についての検証であり、他の内容についてや実態の違う生徒についての「つかむ」での体験課題の妥当性と、家庭科における評価の検討が今後必要である。

5) 考察

家庭科は、実際の生活に直結する教科であり、学んだ内容を「今」の生活に生かしてくことで、卒業後の生活の充実につながると考える。そのためにも、「学習内容の定着と般化」を図るために問題解決的な学習過程を取り入れたことは大変意義があった。

今後は平成30年度のもう一つの課題である「家庭との連携」について、もう一步踏み込んだ取り組みを行っていきたい。例えば、本事例で言えば、「整理整頓」と言っても、クローゼット・タンス・衣装ケース等家庭によって片付ける場所や片付け方に違いが存在する。そのような家庭差も考慮した学習展開も家庭と連携して行うことができれば、より効果的な学習になると考える。

5. 授業実践③ 高等部3年の取組

食べるってどういうこと？

～食のバランスについて考える～

卒業するとすぐに働く生活が始まる。疲れから睡眠を優先させて「食」がおろそかになり、栄養の偏りや体重減少などの様子がこれまでの卒業生から見られた。栄養や調理の学習はしてきたが、「なぜ食べるのか」という、食べる大切さを伝えきれていなかったように思う。本題材は、卒業後の生活を見据えて、食の必要性を自分で考え、答えを導き出す学習の一考察である。

1) 授業実践の目的と方法

授業実践の目的は「食べること」の大切さを知り、よりよい食生活を自分で実現できる生徒の育成をめざす授業づくりを考察することである。

授業実践の方法は、生徒自身が考える場面を大切にし、課題設定からまとめまで、見通しをもって取り組めるようにするとともに、S研：評価（授業後検討会）を行い、よりリアルな生活場面を設定した学習内容や活動になるように授業改善を行う。

2) 生徒の実態

熊本大学教育学部附属特別支援学校高等部3年生は、男子6人、女子3人の計9人の生徒が在籍している。日常的に調理を行っている生徒はおらず、包丁やガスコンロ等、道具の使用の可否や食のバランスへの考え方は様々である。

3) 題材について

①題材の目標

題材の目標は表5に示した3点である。

表5 題材の目標

○知識・技能 栄養素や栄養バランスについて知る。
○思考力・判断力・表現力 自分の食生活を振り返り、バランスや量などを考え献立を立てることができる。
○主体的に学習に取り組む態度 栄養バランスや量など、食事について考え、今後に生かそうとすることができる。

②題材計画

本題材は4次（8時間）の取り扱いである。授業づくりをする上で、教科横断的な視点を踏まえて、題材を計画した。表6が題材計画である。

また、実際の生活場面では想定外が多々あることから、「探究すること」が定着したことは、実際の生活場面において、とても価値があると言える。自分で課題に向き合う態度が育ったことが成果である。

栄養素については、保健科でも取り扱う内容である。今後、他教科との棲み分けや教科間の連携が必要であり、課題である。

6) 考察

家庭科では、生活の主体は「自分だ」という自覚を育てることが大切である。具体的でリアルな体験と友達や教師との対話を重ねることで生活の主体者としての自覚や態度が育まれていくため、実際の生活に近い場面や状況をいかにつくりだすかが、授業づくりの肝とも言える。

また、卒業を迎える高等部3年生の段階においては、生活面での自律や自己管理の成功体験を在学中にたくさん積み重ねることが大切であり、そのためには家庭との連携が不可欠であると言える。

今回、高等部3年9人の保護者に調理に関するアンケート調査を実施した。その結果、家庭と連携して取り組んだことでできる料理が増えたり、調理する回が増えたりしたことが分かった。各家庭と連携して取り組んだことで一定の効果があつたと言える。一方で、「土日に家庭で取り組むことは負担だった」の問いに対し「どちらかといえばそう思う」と答

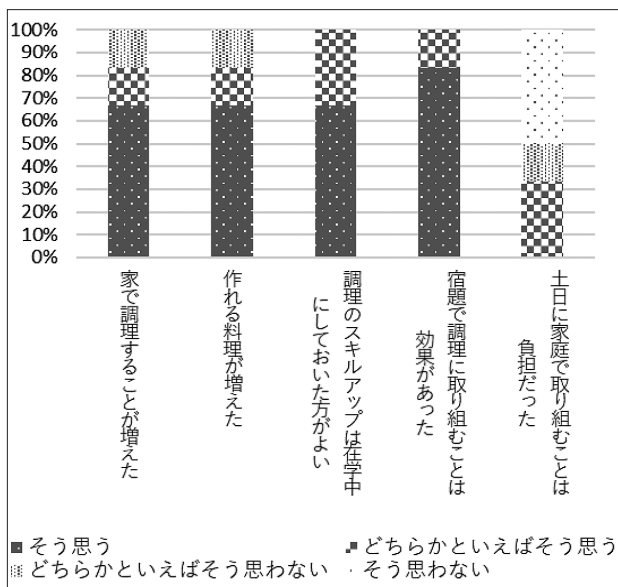


図9 保護者アンケート

普段自分と時間をとって取り組もうと思うと、なかなか大変だけれど、取り組むと、宿題として取り組むことと、回数も増え、それによって、やらせたりと親も考え、出来ることも増え、さよ、良かったと思えます。

図10 取組について、保護者の感想

た保護者も3割余りおり、家庭と学校との連携の在り方がこれからの課題である。

5. 成果と課題

1) 年間指導計画作成

各教科における年間指導計画を作成するに当たっては、下記のプロセスで整備していくことが有効であったと考える。

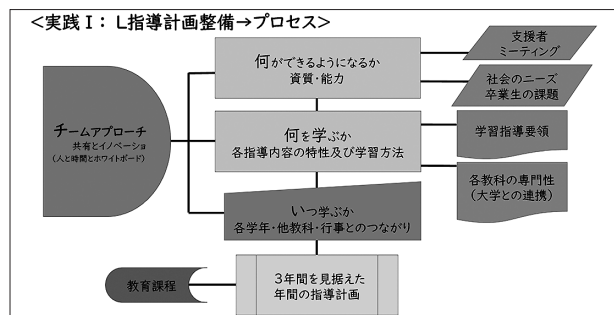


図11 年間指導計画作成のプロセス

学校における学校目標、学部目標から、生徒の将来を具体的に見据えた目指す姿について高等部職員全員で語り合い、高等部で育成を目指す資質・能力について構造図として見える化した。さらに、家庭科における育成を目指す資質・能力を明確に示すことができたことで、学部教育としての方向や方針を全教師が共通理解して授業実践に取り組むことができた。このことから、チームアプローチの重要性を感じた。

また、高等部で育成を目指す資質・能力の「妥当性」と、学習指導要領の「正当性」を照らし合わせ、教科の特性を考慮した上で、生徒一人一人の将来の豊かな生活を見据えた教育課程のあり方を考えていくことが重要であることが明らかになった。

「何ができるようにするか」「何を学ぶのか」という視点に加え、「いつ学ぶのか」という教科横断的な視点や、「どのように学ぶのか」という各学習内容がもつ学び方の特性を踏まえて整理し、授業づくりを行うことが、生徒の深い学びにつながる一歩であると考えられる。

2) 主体的・対話的で深い学びの授業実践

①授業の構成と流れ（学習過程）

新学習指導要領において、家庭科の見方・考え方は、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせつつ、生活の様々な問題の中から課題を設定し、その解決を目指して解決方法を検討し、計画を立てて実践するとともに、その結果を評価・改善するという活動

の中で育成する。」となっており、「家庭科の学習過程」については、図12の参考例が挙げられている。

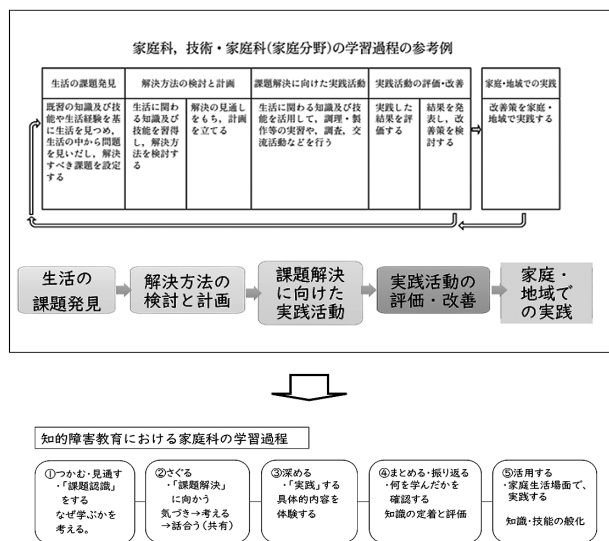


図12 家庭科の学習過程（学習指導要領解説参照 一部抜粋）と知的障害教育における家庭科の学習過程（本校の取組）

本研究では、この「家庭科の学習過程」に沿って授業構成を行い、実践を積み重ねてきた。ワークシートの記述内容や実践の様子等の生徒の学びや、保護者へのアンケート結果等から、一定の成果が上がっていることが分かる。今回の各学年の授業実践から、「知的障害教育における家庭科の学習過程」においても、「家庭科の学習過程」は有効であったと考える。

課題をもって、実際に知識を体験する学習過程は、深い学びへと確実に繋がっている。ただし、学習過程にかかる時間が少し長く必要であったり、生徒の実態に応じた工夫が必要になったりする。

②深い学びに向けた授業スタイル

深い学びに向けた授業づくりについて、「習得」「活用」「探究」による深い学びへとつながるプロセスを、1単位時間や単元単位だけのものだけでなく、年単位として捉え、下記のような授業スタイルのあり方を整理した。

<深い学びを仕掛ける手だて> ～学びのプロセスを意識した授業づくり～

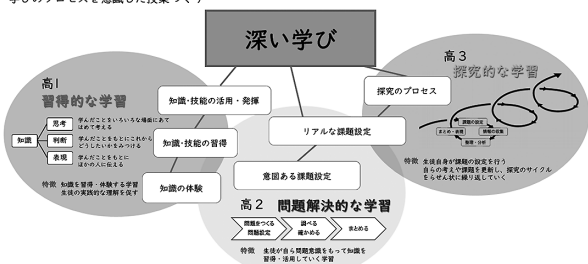


図13 深い学びを仕掛ける手だて

高等部1年次では、基礎的・基本的な知識及び技能を習得し、実践する学習「習得的な学習」とし、生徒の実践的な理解を促す学習として、高等部2年次では、生徒が自ら問題意識をもって知識や技能を習得・活用していく学習「問題解決的な学習」とし、1年次に得た知識を問題解決的な学習をとおして活用していく学習として、高等部3年次では、生徒自身が課題の設定を行い、自らの考えや課題を更新していく学習「探究的な学習」とし、2年次の問題解決のサイクルでらせん状に繰り返していく学習として位置付けることができた。平成31年度は、この授業スタイルによる深い学びへのアプローチが有効であるのかを検証していく。

6. まとめ

高等部の家庭科は、生徒の卒業後の生活の基盤となる部分に直接的にアプローチできる重要な位置づけとなること、育成を目指す資質・能力の構造図や年間指導計画から見えてきた。

授業実践において、1単位時間の学びの過程を「つかむ・見通す」「さぐる」「深める」「まとめる・振り返る」とし、一つ一つの学習過程のねらいや手立てを大切に扱うことで、学ぶ生徒も教える教師も学習に見通しをもち、「なぜ学ぶのか」という意識を高め、自ら「考える」という学習につなげることができたとと言える。また、深い学びの実現に向けた3年間の学習計画の中では、1年次の「習得的な学習」において、しっかりと一人一人の基礎的な知識・技能を育てていくことが、「問題解決的な学習」や「探究的な学習」に向かうための基盤になるため、確実に押さえていくことが必要となる。実際の授業を組み立てるに当たっては、知的障害のある生徒の特性を踏まえ、抽象的な内容よりも実際の・具体的な内容の知識を体験する学習がより効果的であった。

家庭科で学んだ「知識・技能」だけでなく、「思考・判断・表現」の部分においては、生徒が生活の様々な場面の中から、自ら課題を見つけ出し、その解決に向けて考えを深めていく態度を育てることができたと考える。今後も、自ら考え、課題に向き合う態度を育て、他教科等や生活の場面と関連させていくことが重要であると言える。

最後に、家庭科という教科の特質を踏まえ、特に家庭や社会との連携が大切になる教科であり、学校の授業を始点として、学んだことを活用していく機会である家庭と1時間1時間の授業の情報を共有しながら進めていくことが必要となる。

7. おわりに

1) 本実践の意義と課題

本研究は、文部科学省「特別支援が教育に関する実践研究事業（次期学習指導要領に向けた実践研究）」の委託を受け、「次期学習指導要領を見据えたカリキュラム・マネジメント」の研究テーマのもと、附属特別支援学校高等部が取り組んだ実践研究の成果としてまとめたものである。

本研究に着手した時点においては、「特別支援学校高等部学習指導要領」の改正前で、「次期学習指導要領」をどのように見据えて実践研究に取り組むのかが本研究のポイントの1つであった。小学校・中学校・高等学校の学習指導要領における家庭科の内容に関する記述とは異なり、現行の「特別支援学校高等部学習指導要領」では、家庭科において、どのような学習題材を設定すべきなのか、題材指定はほとんど行われていない。本論文で紹介されている実践はいずれも、現行の「特別支援学校高等部学習指導要領」の内容を踏まえつつ、すでに先行して告示されていた「特別支援学校小学部・中学部学習指導要領」における家庭科の内容を読み込み、中学部等との系統性に留意しつつ、生徒の将来の夢や希望、障害の程度、家庭生活の実態等を踏まえて、本校高等部の職員によって開発された題材であるといえる。

また、障害の程度や種類が多様な生徒が学ぶ本校では、多くの教科等では、学年を超えた「縦割り」のクラス編成で授業を行っているのに対し、家庭科の授業は、学年（学級）単位で行っている。このような本校家庭科の教育課程を考えるにあたっては、1年次、2年次、3年次と学年が進行するに伴い、どのように学習内容の系統性を図りつつ、深化をはかっていくのかがカリキュラム・マネジメントの主眼となる。本研究では、1年次において、家庭科の基礎的・基本的な知識及び技能の習得を重視する「習得的な学習」、2年次では、日常生活のリアルな問題を設定し、その問題解決のために1年次に習得した知識・技能を活用する「問題解決的な学習」、3年次では、卒業後の将来の生活を見据え、現段階では想定しえない問題にも対応できるような「探究型の学習過程」を実現した。このような学年進行による学習過程においては、1年次の「習得的な学習」では、「体験」したことの「言語化」（実習や体験を通して気づいたことを言葉で表現する）により確かな理解を得られるように留意し、2年次の「問題解決的な学習」では、何が問題か「気づく」こと、そして、その問題解決のためにとられた方法のよさを生徒が「実感」をもって理解できるように工夫され

ている。また、3年次には、他教科等との連携（国語科で用いた「思考ツール」の活用など）により、生活に関するより深い理解が将来のよりよい生活の実現につながる工夫が行われている。こうした学年進行による学習過程が実現しえたのは、個性豊かで機動性に富むコンパクトな教員集団によるチームアプローチによるものであるとともに、熊本大学教育学部家庭科の教授陣との共同研究により家庭科の「専門性」が担保されたことによるものと考えられる。

平成31年2月に告示された「特別支援学校高等部学習指導要領」によれば、「知的障害者である生徒に対する教育を行う特別支援学校」における家庭科の「指導計画の作成と内容の取扱い」には、「体験的な活動と知識とを相互に関連付けてより深く理解すること」、「生活の中から問題を見いだして解決策を考え、実践を評価・改善して、新たな課題の解決に向かう過程を重視した学習の充実」、「3年間を見通した全体的な指導計画」、「各項目及び各項目に示す事項については、相互に有機的な関連を図り、総合的に展開されるよう適切な題材を設定して計画を作成」すること、「高等部における職業科等と関連付けて効果的に指導を行うとともに、他教科等との連携も図ること」、「家庭や地域との連携」などが記されている。本実践では、これらの諸点がすでに実現されている。

一方、課題として、以下の2点を指摘しておきたい。1点は、中学部「職業・家庭」とのつながりをどのように担保していくのか、という点である。異なる中学校等から入学してきた本校高等部の生徒が、中学校等でどのような学習経験をし、そうした学習経験の中でどのような資質・能力を身につけているのか、情報を得て、その学習経験の上に、高等部の学習内容を配置する必要がある。2点目は、生徒の学習評価をどのように行うのか、という点についてである。今後さらなる研究の充実を目指したい。

（八幡彩子）

2) アンケート結果から

本校卒業生の一般企業への進路先と就労支援コーディネーターが職場開拓で訪問した「障害者を雇用している」及び「これから障害者雇用を検討している」企業100社を対象にアンケートを実施した。アンケート内容は、知的障害のある児童生徒に在学中に身につけてほしい力について、「生活面」「コミュニケーション」「余暇活動」「就労における作業スキル」「就労における社会スキル」の5観点76項目及び記述式で作成した。

アンケートの結果から、企業は在学中にハードス

キル（ワークスキル）よりもソフトスキル（働く意欲やライフスキル等）を身に付けてほしいと考えていることが分かった。また、余暇活動への関心が低いことも分かり、在学中に余暇について学ぶ必要があると言えるだろう。

そこで次年度は、小中高で系統性のある一貫した「ライフスキル」に関する学習の確立と日常へ繋げるカリキュラムの検討が必要である。また、家庭科の授業づくりについては、主体的・対話的で深い学びを追求していきたい。

3) 卒業後の充実した豊かな生活を送るために

職場へ弁当を持参している卒業生が、自作弁当の写真を送ってくることもある。在学中よりレパートリーが増えていたり、栄養バランスや彩りが良くなっていたりする。

また、買い物や食事、カラオケ等、仲間と楽しむ卒業生がいる。ピアノや華道等、一人の時間が充実する卒業生もいる。それぞれに休日を過ごして、「また明日から仕事を頑張ろう」と思い、翌朝、職場に向かう。

卒業後、ライフスキルが上達している姿を見て、日々の積み重ねの大切さを感じる。卒業後も家庭科

で学んだことを実践している姿を見ると、家庭科を学ぶ意義や必要性を思う。

家庭との連携を密にして、一つでも多くのライフスキルを定着させていくことや、社会とつながりを持ち、卒業後の生活を豊かにしていくこと等の視点をもった授業づくりを行うことを大切にしたい。

謝 辞

本研究にあたっては、熊本大学大学院教育学研究科（家庭科教育）の宮瀬美津子教授、武田珠美教授、中迫由実准教授、人文社会科学研究部の増田仁准教授にご助言をいただきました。心より深謝申し上げます。

参考文献

- 文部科学省：特別支援学校高等部学習指導要領（平成31年2月告示）
- 文部科学省：特別支援学校小学部・中学部学習指導要領（平成29年4月告示）
- 文部科学省：特別支援学校高等部学習指導要領（平成21年3月告示）